

第19回「京都御苑ずきの御近所さん」

吉忠株式会社 代表取締役社長
吉田 忠嗣 様



■マネキンのトップメーカーYOSHICHU MANNEQUIN ですが、地元京都のために努力されていることについて御紹介頂けますか。

吉忠株式会社は、1875（明治8）年の創業ですが、マネキン事業は、終戦直後にスタートしました。その頃、マネキンに近い物は島津製作所が造っていたのですが、島津さんはファッション的な物ではなく、人体模型とか教材用のものを造られていて、販売目的が少しちがったものようでした。当時、島津さんの社長とうちの社長が親しかったので、島津さんから「あんたどこ、ファッション関係の会社やろ。繊維関係で儲けているだろうから、うちの人形をもっとファッション性のある形で世の中に出してもらえないか？ファッション業界だったら、マネキンは貢献できるし、全部引き受けてくれないか？」という相談を受けました。それで、島津さんのところにおられた職人や設備、材料を全面的に引き受けることになったのです。たまたま会社が上手くいっている時期だったので、少々赤字を出しても、ファッション、特に女性の服飾、さらには繊維産業に貢献できる人形ができたなら、ということで始めました。フランスでは、それよりも100年ほど前からマネキンはあったようですが、日本では島津さんが最初だったと思います。なので、独自のマネキン人形に命を吹き込むような感じでした。

しばらくは当然ながら赤字だったようですが、数年で赤字が止まるどころか、非常に上手くいくようになりました。島津さんは日本におけるマネキンの先駆者ですが、その赤字部門をうちが引き受けることによってお助けすることもできましたし、また、我々もファッションという大きな括りから見て、人が着る以上に美しく見られるようなプロポーションや、洋服に似合うマネキンの形を探求・追求することで、京都のファッション業界に非常に貢献をしていると思います。

その後、相次いで2つのマネキンを造る会社が京都にできました。一つは今もワコールさんの子会社としてやっておられる七彩さん。それから大和マネキンさんです。結果的にはマネキンの御三家といわれる、全ての会社が京都にあることから、京都がマネキン発祥の地となったんです。御三家が日本におけるパイオニアとして、全国に向けて発信することで、結果的に京都の産業に貢献することにもなりました。

ファッション以外の社会貢献はと言いますと、一点目は、マネキンの廃棄を確実にやってきたということです。マネキンは、最初は紙で造られていました。ところが、紙は重くて水に弱いですよ。加工は容易なのですが、壊れやすく、破れやすいんです。なので、ポリプロピレンという素材に変えました。プラスチックに近い物ですが、今度は壊れないがための問題が出てきました。捨てても、土に還らないのです。紙ならば何十年と経てば土に還りますが、ポリプロピレンはいつまで経ってもそのままの形で残るので、もしかすると、公害になってしまう可能性があります。うちのマネキンが原因となって、京都のみならず、特に市民の方々にご迷惑をかけてはいけません。また、在庫になったマネキンは、一切安く売らないと決めています。普通ならば、少しでもお金を回収するために、在庫になったら見切り品も含めて売り切りますよね。でも、そうするとマネキンの行方を追跡できなくなってしまいます。うちとしては、使い古した物がどこにいつ、最終的にどうなったかを知ることは大切なことなんです。変な場所に捨てられたり、廃棄されたりすると、それが一つの公害の元となってしまいます。うちでは、逆にお金をかけてで

も全てを廃棄して、間違いのないようにしています。非常にお金が掛かることなのですが、「うちの会社だけが儲かれば良い」という考えはありませんので、壊すことにお金をかけ、一切売らないということを何十年も継続してきたことは、社会貢献ができていないのではないかなと思います。

それともう一つは、一回か二回しか使っていない、十分にまだ使用できるマネキンの活用です。

マネキン事業は、もともとレンタルでした。今は売り切りとか買い取りが増えてきましたが、昔は全部貸しマネキンだったんです。京都や東京、大阪の一流のデパートに一回下ろして、1~2週間で返してもらう。一流のデパートには新しい物を供給するのですが、一度貸して返却されたマネキンに、ラッカー等を吹き付けて真っ新にしてまた貸したんです。今度はもうちょっとローカルなところに、キレイに直したマネキンを貸しました。それがまた返ってきますよね。最終的にはもう少し過疎地にあるお店に貸す訳です。だから二回から三回ぐらいは使って、最終的には自分たちの元に返ってきますので、廃棄処分もできていたのです。

話は変わりますが、私は、今から四年ほど前まで、九年間、京都府の公安委員会の委員長を務めていましたが、うちが吉忠マネキンということもありまして、交通安全週間などの時にはマネキンに女性警官のユニフォームを着せて、啓蒙する活動をしていました。無料でお貸したマネキンは、交番所の前などに立ってもらいました。生身の人が朝から晩まで何交代かして立つのは大変ですが、本物の人間に似せて造った「リアルマネキン」であれば、暑さや寒さ、疲れも関係ないですし、人件費も掛かりません。それに、リアルマネキンが立っていると、良い意味で通りがかった人がびくっとされるんです。だます訳ではないのですが、例えば交通違反などを取り締まる場所に、女性警官の服を着せたマネキンを立たせておくと、スピード違反が減るんです。本当は人形なのですが、通る人は「あっ、しまった。見られているな!」と思う訳です。所謂、かかしと一緒にですね。うちは、リアルなマネキンを造るのが非常に得意ですので、その技術を犯罪抑制・防止にも繋げていったのです。いろんな形でマネキンが活躍していることも、京都のためにお役に立っているのではないかなと思っています。

うちで造っているマネキンの歴史については、会社で展示をしています。うちがマネキンを造り始めた1950年頃から、10年刻みぐらいに解説したものです。マネキンの一般的な高さは、大体170cmぐらいです。なぜかと言うと、私の若い時に、七頭身技術が流行ったからなんです。当時のミスユニバースであった伊東絹子さんは、顔が小さくて背丈が高かったので、七頭身と言われていました。今の人たちはもっと背丈も高くなり、顔が小さい人もたくさんいらっしゃいますが、昔はそう多くもなかったもので、一般の人よりもスタイルが良いように、マネキンは七頭身、八頭身で造っていました。また、ある時代にはミニスカートが非常に流行りました。英国にツイギーという有名モデルがいたのですが、ミニスカートが非常に似合っていて、一世を風靡したんです。彼女はうちが買収した英国の「アデル」という名前のマネキン会社の専属モデルだったんですが、そのマネキンが日本に入ってきた訳です。1950年代、60年代、70年代……と、2000年代に至るまで、その時代のマネキンがどのような姿だったのか、1~2体ずつ並べて、展示しています。我々の課題である「美」、「女性をより美しく」ということを、今でもずっと追求しています。もし展示を見せてほしいという方がいらっしゃれば、お見せするようにしています。一つのファッションの服飾史、マネキン史を伝えるというような形で貢献していると思っています。

■吉田様の座右の銘の「^{りけん}離見」について、教えてくださいませんか？

「^{りけん}離見の^{けん}見」を、略して「^{りけん}離見」と言いますが、室町時代の初期の、能楽の中興の祖といわれた世阿弥の言葉です。結婚式などで言われる「初心忘れることなかれ」という言葉が有名だと思いますが、これは風姿花伝という、世阿弥の言葉をいくつか綴った伝書に出てきます。伝書には他に「^{かきょう}花鏡」というものがあって、これは舞の専門家に対する教育書のようなものなのですが、その一節に「^{りけん}離見の^{けん}見」が出てくる訳です。

己の舞姿が、上手く舞えているか、あるいは見苦しいかということは、自分だけで考えていてもわからない。自分で自分の舞姿、ましてや後ろ姿なんて、鏡に写さない限り見えませんよね。だから見所、つまり客席から伝わるリアクションで「あ、感動を与えているな」などがわかる訳です。いかにお客さんが満足して、熱中して、集中して観てくれているかどうかで、プロの能楽師の優劣は決まるのですから、必ずしも自分だけ独断で舞をしていたのではダメなんです。自己満足で上手くいっているなんて思ったって、とんでもないボロが出て、笑われているかも分からないから、あくまで客の反応を通して判断、勉強していかないといけないよ、と。それが「離見」、離れて見ることで、相手側から見ることで本当の意味で我が振りを直せるんだ、ということです。

経営に関しても、自分の会社だけで満足して、自分で勝手に物をつくっても、お客さんが喜んでくれなかったら在庫になるだけですよね。いかにお客様に喜ばれるようなものをつくるか。実際には、そのニーズを自分で受け止めながら考えなければいけません。ですので、単眼的な物事の見方ではダメで、複眼的な形でなければ、結局、商売は成功しないんです。仕入れ先に対しても、得意先に対しても、出来上がってきた商品に対しても、あるいは従業員に対しても同じです。経営者が勝手に「うちの会社は従業員に愛されている」なんて言っても、実際は不満ばかりかもしれない。相手の気持ちを思ってもものをつくらなければいけないし、考えなければいけないということです。「離見の見」という言葉は、商売にも人生にも言えることだと思うんです。

うちの父が非常に好きな言葉でした。座右の銘は、実は、父から引き継いだものなのです。現代も、何かあった時はやっぱり反省しなければいけない、怒りすぎたなとか、ちょっとサボりすぎたな、などのように、相手の見方で考えなければいけないということなんですね。

このように離見は、能楽に関係の深い言葉です。どうして能楽の言葉が、座右の銘になっているか、その背景について少しお話しします。

元々、うちの家は室町通を挟んで金剛能楽堂のはず向かいにありました。昔は、よく、読み書きそろばんとか、教養のある人は、何か嗜めとか言われました。それが、所謂茶道であったり、華道であったり。うちの父は男性でもあったから、やっぱり能楽を習いなさいということがありました。

金剛流の今の家元の、お祖父さんにあたる人が、うちの父よりまだ年齢的に上だったんですね。うちの父が6歳ぐらいの時から、非常にこの方に可愛がって貰ったんです。可愛いボンがいるなと。その家元にまだ子どもが生まれる前だったんです。それでいろんなことを教えて貰ったそうです。結果的にはアマチュアとしてはですね、非常に、私が言うのも何ですけども、能楽の造詣を深めて一生を過ごしたんです。ほとんどプロと同じぐらいの修行はしてる訳なんです。むしろプロを教えるぐらいの力があったんです。だから能も何番も舞ってますしね。ちょっとした謡本なんかの場合も、何十番でも、まったく無本で謡えました。やっぱりね、記憶力がいいんですね。だから本なんかなくたって、ほとんど覚えてるというぐらいだったから。これもプロ以上やったかもわかりませんよね。それで、先々代の家元にですね、教えて貰ったのを、秘伝といえるのかわかりませんが、口で伝えるものが多かったんで。そんなをずいぶん教えて貰ったらしいのです。それから後に生まれた次の家元に対しては、先輩格というか、いろんなお話をさせていただき、まあ指導っていったら失礼な言い方ですけど。そういうことで、代々金剛さんの宗家とはつながりがあります。

それで、僕は、同志社大学でしたけど、大学2回生の時に、同志社に金剛流だけ無かったんです。観世とか金春とかはあったんですけど。能楽には、五流がある訳なんですけど、京都に家元がありながら、同志社大学の能楽部に、金剛流がないのはいかんといって、僕がつくったんです。去年、それができて60周年になって、ずっと続いているというのは、非常にありがたいことやなと思う訳ですけどね。そうは言うても、必ずしも僕は謡は上手くないですよ。うちの父は大したものでしたわ。

■思い出の中で、京都御苑にまつわるものはありますか？

私が通っていた同志社中学のすぐ近所に、京都御苑がありました。歩いて5分、10分で入ることができたんです。その時から、私たちにとっては開かれた御苑だと思っていました。特別な人しか入れない訳ではなく、中学一年生でも、小さな子どもでも入れて、当たり前のように、鬼ごっこをしたり、柔らかいボールを使ってキャッチボールをしたり、三角ベースのような野球に近い真似をやったり、いろんなことをしていました。天気が良かったら「御所へ行って遊ぼう」と言っていました。今は随分と変わりましたが、当時も同志社中学校に立派なグラウンドがあったんです。でも、大学の相撲部とか、いろんなクラブ活動のための運動場でもあったので、グラウンドが使えない時が多かったんですよ。一年生から三年生まで各クラスがあって、先にグラウンドを取った方が勝ちだとか、他にも「クラブ活動で使うからどきなさい」と言われたらこともありました。そういう時に、逃げ鉢と言ったらおかしいかもしれませんが、御所へ行っていました。御苑の方が広いし、環境も良いでしょう。特に、私が中学生の時なんて、車を使う人がほとんどいなくて、自転車もあんまり通りませんでしたから、御苑の中に行くのが一番安全でもあった訳です。こんな風に、御所という非常に立派な場所を、我が物のように使わせて頂いて、最高に素晴らしかったです。まさしく、子どものための大国民公園でした。中学の三年間は、そうして過ごしていました。

高校時代は、岩倉の高校で過ごしました。うんと田舎だったけれど立派なグラウンドがあり、「さらば御所」という気持ちだったのですが、三年で卒業して御所に戻ってきました。大学の四年間は今出川にある同志社大学に通いましたが、御所の使い勝手は以前とは違うものになりました。読書をしたり、天気が良い時には散歩をしたり、頭を休める時にも利用させて頂きましたし、毎日ではなくても、一週間に一回や二回は当たり前のように行っていました。中学生の頃、それからある程度成長した大学時代、と自分の成長の基盤に御所があります。それも学校生活とのコンビネーションのように、学生時代の一環だった訳です。

何よりも、やっぱり歩いてすぐ行けたことが良かったと思います。しかも、込み合って大変ということがないんですね。いつでも御所に行けば、座ったり遊んだりできたんです。さらに、御所は無料ですね。例えば百円であったとしても、有料だったら子どもにとっては入りにくかったと思います。御所が無料だったおかげで、中学時代は、近所にあったお菓子屋さんでキャラメルや小さいチョコレートやキャンディーなどを友達と一緒に買っては、御所で食べて過ごしました。私にとってはこういう経験が大事で、思い出として残っているということは、情操教育にプラスになったと思います。

御所に対する思い出は「どこで何か特別なことがあった」というよりも、自分の感覚の中に非常に溶け込んでいるんです。今も懐かしく思います。御所に行ったら、その時の記憶が蘇るということは非常に有難いことですし、私と同じような感覚の人は結構いるんじゃないかな、と思います。私にとっての御苑は、自分の生活や人生の一環であり、よすがであると思います。

■京都御苑の今後について、御意見などございましたら自由におっしゃってください。

今は毎日のように一般公開をしていますよね。そうは言っても、昔も特殊な場所や建物が見られないだけだったので、御所のほとんどは、昔も今も、毎日朝から晩まで一般公開しているようなものだと思うんです。御所とは天皇陛下がお住まいになるところで、国民公園の中では別格であるにも関わらず、昔から解放されていましたよね。私にとっても、中学生は中学生、大学生は大学生として、あの中で集ったり、あるいは一人で散歩したり、いろんなことがありました。

私から言えば、九割方は、朝から晩まで一般公開されているんです。だから、ある特定の場所に関しては、特別な時に限って公開しても良いのではないかと思います。「絶対に見せられない」と言われたら嫌ですが、いつでも見られるということは、逆に贅沢すぎると思うんですよ。印象

が薄くなったり、かえって行かなくなってしまうかもしれません。他の公園とは違い、御所は特別、品位品格のある場所で、天皇陛下が京都にお越しになる時には泊まれる場所なんです。なので、普段はなかなか行けないけれど、一年に何回かに限っては行ける、というような、崇められる場所にすると、良い意味で特別地帯になります。

皇居にも、ある場所に関しては、勲章を頂く時にだけ、勲章をもらえるような頑張り方をした時にだけ、ご褒美として行ける場所があります。普段は制限をされながら、良い時だけ、良いことをした時だけに行ける訳です。なかなか行けないけれど、行ったら一生の思い出になる、という場所が御所にもあって良いと思います。

迎賓館にしても、同じような思いがあるんです。迎賓館が建設されたとき、私は公安委員を務めていたので、当時の小泉総理大臣よりも先に迎賓館へ行きました。訪問というよりもチェックをするためです。府警本部長たちと一緒に、四時間ほどかけて、一般の方は見られない場所もすべて確認しました。自分が行けたから他の人にも見せたい、ということではないのですが、特別な時だけ行けて、やっぱり他の人もいつか行くことができるとか、そういう奥ゆかしさがあっても良いと思うんです。

毎日のように一般公開があるので、御所が傷むとよく言われますよね。誰でも行けるということは良いことかもしれませんが、そうするのであれば、参観する前のオリエンテーションやインフォメーションで、こういう形で尊重して欲しい、大事に見て欲しい、ということをしつかりと伝えながら見て頂くことが、最低限必要なのではないかなと思います。

日本人だけではなく、外国人も含めて、マナーの問題もありますよね。やっぱり、御所は我々の心のふるさとのような思いがあります。他の人にも大事にして欲しいですし、知らない人間がゴミを捨てたり、その度に整備員が大変になったり、そういう風にはなってほしくない、という思いです。英語や中国語、フランス語も必要になってきて、いろんな言葉があつて大変だと思いますが、対策が後手後手になってほしくないですね。

それと、私は公安委員を務めたことで京都御苑に関する責任者の一人になりましたけど、こよなく御所を良い形で愛し、普及させるためには、もっともっと良いところをみなさんに知ってもらうような努力をしなければいけないのではないかなと思います。それが本当の意味で、開かれた御所だと思うのです。例えば、新宿御苑ではフォトコンテストや盆栽展、蘭展などを開催していますよね。一般の方々から公募して、賞を出す。そういう一般参加的なイベントで御所が知られていくことも、良いのではないかなと思います。話を聞いていると、新宿御苑のフォトコンテストでは、何百通もの応募があったそうですよね。京都御苑でも取り組んでおられるかもしれませんが、より一般の方々と交流をした方が良いのではないかなと思います。例えば、学生の写生大会など、他所が催したイベントでも、良いところは大きい真似をしたり、京都風にアレンジしたりということも、考えていく必要があるのではないかなと思います。待ちの体制から、努力をして攻めの体制で行動することによって、もっともっと京都御所の良さが伝わるのではないかな、というのが私の考え方です。そう思うと、いくらでもやるべきことがあるのではないかなと思います。

2017年5月23日 インタビュー
聞き手：田村省二、中西甚五郎

○吉田忠嗣さま プロフィール○

1960年同志社大学経済学部卒業後、吉忠株式会社入社。カリフォルニア大学卒業後、1966年に取締役を経て、1987年代表取締役社長就任。（社）京都経済同友会特別幹事、（社）京都市観光協会副会長、京都商工会議所ファッション産業振興特別委員会委員長など各種団体の要職を兼務。